

Title	「出前朝日」を利用した上級作文授業の試み
Author(s)	古川, 由理子
Citation	大阪外国語大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2006, 4, p. 37-46
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/8492">https://doi.org/10.18910/8492</a>
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 「出前朝日」を利用した上級作文授業の試み

古川 由理子

## 【要旨】

作文授業に関して、書くスキルやストラテジーの向上という面からの研究や、評価方法の模索による改善の提案は従来から行なわれている。特に、上級者対象の場合、学習者が既にかんがりの作文授業を受けてきていることもあり、ともすれば単調になりがちである。本稿では、そのような上級作文授業のバリエーションの一つとして朝日新聞社主催「出前朝日」による新聞作成を紹介する。「出前朝日」では、記事の作成から構成まで学習者が主体性を発揮して作業を行なう。記事には字数制限があり、見出しも考えなければならない。このような作業は上級学習者が挑戦するに足るべき課題であり、その主体的活動の中で学ぶことも多い。また、見出しをつける作業には、文章を要約する力も求められるため、読解能力の向上にも役立つと考えられる。本稿は、「出前朝日」を実際に取り入れた授業を具体的に紹介し、今後の上級作文授業の参考として提示するものである。

## 1 はじめに

上級学習者対象の作文授業に頭を悩ませる教師は多いだろう。学習者の中には、日本の大学で日本人学生と共に学べるだけの日本語力を備えている者もあり、そのレベルに達するまでに、既に日本語による作文授業や論文指導などを受けてきている。その一方、作文や論文の授業は、学生が書くことに主眼が置かれるため、教師によるメリハリがつけにくい。「授業で毎回毎回書かされるのは嫌だ」という学生の不満もよく耳にする。

作文授業の改善を目指し、日本語教育では、これまで主に書く力の向上に中心を置いてきたようである。先行研究を例に取れば、母語話者と学習者の接続詞の用い方を調査した安藤(2002)や、作文産出過程における第一言語の影響について考察した矢高(2004)などがあり、これらは作文を書く際の有効なストラテジーを模索した研究である。また、評価法による授業の改善を目指す研究として、推敲に関する講義が学習者の推敲能力に有効であるかを検証した田中信之(2005a)、教師によるフィードバックについて考察を深めた田中真理(2005)がある。一方、ポートフォリオ評価を取り入れた川村(2005)やピア・レスポンスによる相互評価を行なった田中信之(2005b)などは学習者側からの評価の試みである。このような研究成果により、文章全体に結束性を持たせるための接続詞やメタ言語表現の指導、ピア・レスポンスの試みなど、教育現場において様々な工夫が可能になった。近年では、多様な場での書く力養成のため、実生活に近いものとしてメールや案内状などを練習させる教科書も出てきている<sup>1)</sup>。さらに、書くことを楽しむという面も注目されてきているようだ。しかし、大学における作文指導に期待される第一の点が、論文に代表される学術的文章を日本語で書く力の養成であるなら、学生にとって「楽しくない」文章中心の授業になるのはやむを得ない。ただ、コース全体を見渡せば、その中に何らかの変化をつけ、学習者の興味を惹き、書くことを楽しめる工夫をすることは可能である。本稿では、そのような取組みのひとつとして、日本語教師にまだあまり知られていない、朝日新聞社主催「出前朝日」による新聞作成を紹介し、授業のバリエーションの一つとして提示する。

## 2 「出前朝日」の概要

「出前朝日」とは、記者による講義と新聞作成の実習が二本柱になった朝日新聞社による「新聞作り移動教室」である。実際の講習は3時間程度で行なわれ、講習当日にはパソコンやプリンタなどを搭載した「出前Asahi号」というトラックが来校しての実技となる。以下にその大まかな流れとその注意点を記す(詳細は朝日新聞大阪本社・出前朝日事務局によるパンフレット参照)。

申し込み・日程調整：実施日の3ヶ月前を目処



会場の確保：記者講習の教室と実技の教室が別であるのが望ましい  
実技会場にはパソコン用の机18台が必要  
カラープリンタ用に電源がブレーカ別2系統必要  
出前Asahi号の駐車場所の確保



原稿作り：実施日までに授業で行なう

- ①「紙面ひな型」(朝日新聞社より送付)に沿った原稿の準備
- ②フロッピーに保存：朝日新聞社の指示に従い入力
- ③フロッピーの送付：実施の1週間から10日前を目処
- ④写真の用意

実施日までの注意点は、まず大学側との日程調整と会場の確保である。「出前朝日」では、新聞社側がパソコンやプリンタを実際に搬入しての講習となるため、トラックの駐車場所や教室の確保など、大学の関係部署と事前に打ち合わせる必要がある。日程に関しても、授業の進行上、より良い時期に開催するため、大学側との事前の協議が欠かせない。このような事前準備を行なった上で、実際の講習に向けて原稿作りを授業で行なうわけだが、筆者は他学において「出前朝日」を上級作文授業に取り入れたことがある。本センターとは異なり、アジア中心の学部留学生(中国16名・韓国1名の計17名。全員日本語能力試験2級合格程度のレベル)を対象とした週1コマ(90分)の作文授業<sup>2)</sup>であるが、本センターにも応用可能であると考え、その試みについて、次章で具体的に述べる。

## 3 事前練習－新聞記事に慣れる

上級の学習者といえども、日本語で新聞をあまり読まないという者も多い。そこで、授業では実際に朝日新聞をいくつか持参し、興味のある記事を学生に探させ、見出しの付け方や記事のレイアウトなどについて意見交換させるのも今後の新聞作成において動機付けに役立つ。新聞を扱う授業に役立つであろう教材には、次のようなものがある。

【実例で学ぶ 日本語新聞の読み方】小笠原信之(1991) 専門教育出版

このテキストは新聞読解を意図して編集されたものだが、新聞記事の基本としての約束事を一

通り学べるようになっていて、新聞作成においても有用である。第一章の目次は以下のようで、見出しや記事を学生が自分達で書く際の参考になる。

第1章 ①見出しを読んでみよう

②本文は5W1Hと逆三角形

③前文は情報の缶詰

④第一報と続報

(①～④の番号は筆者)

ここで特に参考になるのが①と③である。①では見出しの特徴として現在形や体言止めが多いこと、決まり文句が多いことなどが解説され、③には前文にふさわしい見出しを考える練習がある。「出前朝日」では学生が自分たちで記事を書くだけでなく、見出しも考えなくてはならない(次章参照)。このような練習は、自分の記事に対する見出し作りだけでなく、文章の要旨を把握し、まとめるという意味で、読解にも役に立つ。②では、新聞記事が結論から先に述べる逆三角形であることが示されているが、これも読解のストラテジーとして応用できる情報である。ニュースをより早く伝えるという新聞の性格上、このようなスタイルが選択されているのだが、学生が書く記事にはニュースというよりエッセイ的なものが多いため、必ずこの形式に従うというのではなく、新聞記事の特徴として確認するにとどめてもよさそうである。

#### 「朝日新聞で日本を読む」伊藤博子他(1990)くろしお出版

これは上級というよりはどちらかと言うと中級の学生に適した読解用教材である。ただ、終わりの方の章は実際の新聞の段組みに近い形で活字化されており、テキストとして使用しやすい。また、見出しなどもついているので、見出しから記事の内容を連想したり、教師が見出しを隠し、学生に考えさせるなどの練習に使用することが可能であろう。

#### その他の教材

「日本語中級から上級へ 朝日新聞読者の声」(1994・朝日カルチャーセンター)は、読者の投書を題材にした読解教材である。また、朝日新聞社発行のテキスト冊子として「新聞にチャレンジ—先生のためのNIE<sup>3)</sup>ガイド」(2002・朝日新聞NIE委員会事務局)がある。これは留学生向けというわけではなく、日本での学校教育に新聞を取り入れようという主旨のもとに編集されたテキストであるが、留学生対象の授業にも参考になる点が大いにある。特に、新聞作成を目指すにあたっては、3章「新聞に挑戦」に見出し作成やレイアウトのコツ、記事の書き方が具体的に紹介されているため、記事作成の準備段階に有効であろう。尚、2章の「新聞を使った具体的な授業の進め方」は朝日新聞ホームページ、asahi.comの教育・NIEページでも閲覧することができる。尚、本センターで開発された大阪外国語大学日本語教材叢書においても、27号「上級日本語」第10章に「新聞記事から情報を読み取る」ことが学習項目として挙げられている(詳しくは荘司(2005)参照)。

#### 4 原稿の作成

「出前朝日」には〔新1号型〕から〔新7号型〕までの7種の紙面(A3版)の雛型がある。本講習では縦組み/縦題字の〔新1号型〕を選択した。記事は①から⑤まであり、記事①および②は写真付きである。授業では受講者17名をA班(6名)・B班(6名)・C班(5名)の3

つのグループに分け、それぞれリーダーを決めて準備に当たさせた。〔新1号型〕の記事のレイアウトは以下の通りである。

〈記事①のレイアウト〉

- 【記事①】 1行12文字で67行 =804字
- 【写真①】 長方形
- 【えとき①】<sup>4)</sup> 1行36文字で行数制限なし
- 【見出し①A】 9字
- 【見出し①B】 10字
- 【見出し①C】 10字

〈記事②のレイアウト〉

- 【記事②】 1行12文字で52行 =624字
- 【写真②】 正方形
- 【えとき②】 1行18文字で行数制限なし
- 【見出し②】 9字

〈記事③のレイアウト〉

- 【記事③】 1行12文字で11行 =132字（編集後記を想定）
- 【見出し③】 6字

〈記事④のレイアウト〉

- 【記事④】 1行12文字で47行 =564字
- 【見出し④A】 10字
- 【見出し④B】 10字

〈記事⑤のレイアウト〉

- 【記事⑤】 1行13文字<sup>5)</sup>で24行 =312字（コラムを想定したハコ組み）
- 【見出し⑤】 8字

記事は字数にばらつきがあるため、記事①を2名で分担、あるいは短い記事2つを1名が担当するなどの提案を教師から行なったが、原則として担当は学生に任せ、記事原稿の執筆と写真の用意（デジタルカメラによる撮影）は夏休みの課題とした。記事には字数制限があるため、見出しやえときも含め下書き用紙を用意し、それに書いてくるよう指示した。その後、筆者が校正を行ない、見出しなどの再考を促した。学生は自分たちの立場からさまざまな記事を書いたが、確認をしなければ意味の取り難い箇所があったり、字数が守られていなかったりして、準備にじゅうぶんな時間をかける必要性を痛感した。特に、新聞記事の場合、指定された字数よりも量が少なければ、紙面に空白ができてしまう。従来の作文授業でも大まかな字数の目安はあったものの、今回のような視覚的な効果まで考える必要がなかったため、字数いっぱいを書くということが学生には難しかったようだ。

## 5 原稿の校正

完成した原稿は「出前朝日」側の指示に従ってコンピュータ入力を行ない、フロッピーに保

存して新聞社に送ることになっている。入力、保存はそれほど難しくなく、指示どおりに学生が自分たちで行なうことはじゅうぶん可能である。

原稿送付後数日して、朝日側から紙面に組み立てたものがファクスで送られて来る（写真、題字、発行責任者はこの段階では空白）。それと共に、担当記者よりアドバイスをもらうことができる（今回は、①見出しが短いものがある ②言葉のだぶりがある、の2点を再考するようというものであった）。講習直前の授業で、送られてきた紙面をコピーして配布すると、学生は自分たちが書いたものが実際の新聞のようにレイアウトされているのを見て、かなり喜んでい様子であった。アドバイスに基づいて再度改善をし、題字と共にファクスにて校正原稿を送付した。題字は新聞の名称のことで、実際の講習ではA班、B班を3名ずつに分けて実習することだったので、合計5つの名称を学生がそれぞれ考えた。

A班 七彩橋 華彩誌

B班 情趣中国 遊子心

C班 紅葉新聞

校正後の記事を一部、紹介しておく<sup>6)</sup>。

尚、作成後の紙面を例として2種、添付で示す。

見出し①A - 白頭偕老 共結連理

見出し①B - 立派な式に綺麗な花嫁

見出し①C - もう一つの人生始まる

記事①

中国には「男大当婚、女大当嫁」という諺がある。結婚儀礼や風俗習慣について、中国の歴史は非常に長く、地域も広く、民族も多様なので、それぞれみな違うということだ。しかし、現代の結婚式にはここ最近の経済発展の影響が大きく、20年前に見られたような革命式の結婚式というのはほとんど見られなくなった。主な結婚の形式で比較的好く目にするのが、やはり大規模で盛大な結婚披露宴を催すものだ。結婚式の規模は、一般的に新郎の経済状況や社会的な地位に比例している。また、発展している地域（例えば沿海側の都市）の結婚式ほどより盛大で、新郎新婦の受け取る礼金も多くなる。それに比べ、内陸地域の結婚式はそんなに大規模なものではない。街にあるホテルやレストランで行うか、農村においては新郎新婦の自宅で行うというものもある。四年前に日本語学校で知りあった友人が今年の9月に結婚することになったので、北京まで行って来た。式前日に北京に着き、荷物はホテルに置いたまま急いで友人の家に駆けつけた。人々が忙しく働いている様子を見て、私も手伝いに加わった。部屋をきれいに飾るため、各種の生花を注文し（バラは「永恒の愛情」を象徴していて、数によって意味も違うらしい）、軽気球も準備し、緋色の「喜」という切り紙なども窓に貼り付けた。準備が終わると、部屋の様子は全く新しくなった。翌日、新郎が自宅から車に乗って新婦を迎えに来た。新婦の家に新郎が到着すると爆竹が鳴らされ、新郎が着いたことを知らせる。その後、新婦に花束を渡し、新婦を抱き上げて、階段を下るということもある。式場に行って正式に結婚式が開始するが、宴会前に多くのことをしなければならない。例えば、主婚人・証婚人・紹介人の入席だ。証婚人は法定の結婚証明書を読み上げる。そして、新郎新婦が指輪を交換すると全ての儀礼が終わる。これが一般的な結婚式の流れだ。

えとき① - 新郎は新婦の家に着き、新婦に花束を渡して、新婦を抱き上げ、階段の一番上から下まで下りていく

見出し④A－ 韓国ドラマの熱風  
見出し④B－ 冬のソナタとヨン様  
記事④

「冬のソナタ」が日本で革命のような人気を呼んでいる。韓国では放送終了後2年にもなっていて忘れられつつあるドラマ「冬のソナタ」が、現在日本で視聴率20%を越えたという。「冬のソナタ」の主人公、ペ・ヨンジュンは日本で様をつけて「ヨン様」と呼ばれているくらい人気者でもある。

先日、テレビで「独占！ヨン様スペシャル」というタイトルで、ヨン様の日や冬ソナに出てくる人たち取材し、冬ソナの撮影地などを紹介する番組が放映された。2時間かけて放映された「ヨン様スペシャル」を見て、韓国の文化がここまで来たのだなと大変嬉しかった。私の家の前にある商店街の名前は「冬ソナ商店街」という。これだけみても「冬のソナタ」の人気を容易に感じられる。また、テレビを見れば「ヨン様」が出てくるコマーシャルがいくつもある。「冬のソナタ」での「ヨン様」の人気は言葉で表現できないくらいだ。

「ヨン様」は特に30～40代のおばさんファンが多いらしい。「ヨン様」と「冬のソナタ」の撮影地を見学するために韓国に旅行するおばさんたちで、12月まで飛行機の韓国便はいっぱいだといううわさも聞いたことがある。このように「冬のソナタ」の日本での人気は、もの凄い。「冬のソナタ」は単にドラマとして人気があるだけではなく、韓国という国や韓国の文化を知らせるよい機会になった。



例1 「華彩誌」



例2 「紅葉新聞」

## 6 実際の講習－新聞の作成

講習では、まず、記者講習が1時間ほど行なわれる。その間、別の教室で朝日側のスタッフがコンピュータや印刷機の搬入など、新聞作成に向けての準備を進めるためでもある。記者講習では新聞の歴史や新聞の構成などが具体的に説明された。日本初の新聞の写しなどが実際に示され、学生たちは興味深げに見入っていた。また、記事が重要な情報を先に述べる逆三角形であることや、5W1Hの重要性についても説明があったため、4章で述べたような事前学習を行なっていれば、理解も深まったと考えられる。その後、新聞ができるまでを実際に映像で示した20分ほどのビデオをはさみ、紙面作りの具体例が紹介された。今回の講習では、前年に起きたアメリカでのスペースシャトル墜落事故の際の朝刊作りが具体的に取り上げられ、新聞社からの距離によって紙面内容が様々に異なることが示された。例えば、シャトル事故は日本時間未明に発生したため、遠隔地の場合、事故にはまったく触れられないままの紙面であった。しかし、近隣地域になるほど、次々に明らかになる事故の詳細を紙面に取り込むことができ、最終的には最初の記事とまったく異なる第1面となっていた。近隣地域に配達されるまでに、実に5版もの紙面が作られていたのである。新聞作成の実際の現場での話は臨場感があり、第1版から移り変わっていく実際の記事が比較して提示されたため非常にわかりやすく、興味深い内容であった。また、「出前朝日」に関して、最近の日本人学生は記号や絵文字を見出しなどに多用する傾向があるが、安易に記号に頼らず、言葉で説得する努力をする方がいいのではないかという指摘もあった。

その後、教室を移動しての実習となるのだが、前面の大きなスクリーンでコンピュータの操作が確認できるように机が配置され、それぞれに専用のコンピュータが置かれていた。コンピュータには各班の原稿が既に新聞の雛型と共に入力されており、学生たちがひとりずつ、指定の場所に記事を埋め込んでいく作業を行なった。また、題字や見出しはいろいろなパターンや色を選択することができ、学生たちはグループごとに和気あいあいと楽しみながら作業に取り組んだ。朝日側のスタッフは3人で、学生の質問への対応や紙面へのアドバイスをを行ったりする。実習自体は、それ以前に既におおまかな紙面ができていたこともあり、スムーズに進むと考えておいてよいだろう。

## 7 受講生の反応

今後の反省材料とするため、講習後の授業で学生にアンケート調査を行なった。本章ではそれを抜粋して紹介し、本稿のまとめと今後の課題としたい。まず、「[出前朝日による新聞作りは面白かったですか]という問いに対して、14名中13名が「はい」と回答し（他の1名は「いいえ」と回答）、[来年、後輩にもこの授業をした方がいいと思いますか]という問いも同様であった（「いいえ」と答えた学生は同一人物）。[コンピュータの使い方の説明はわかりやすかったですか]に対しては全員が「はい」と回答し、記者の講演についての感想は概ね「面白かった」「よくわかった」など肯定的なものであった。ただし、「初めの説明は面白かったが、だんだんわかりにくくなり、最後の方は少しつまらなかった<sup>7)</sup>」「よくわかったが、記事の書き方や見出しのつけ方がわからなかった」という意見があった。[パソコンを使って、もっとしたかったことがありますか]という設問には半数の7名が「特にない」と答えていた。具体的に挙げたものとしては「新しい情報を調べたい」「写真の配置をもっと工夫したい」「もっと詳しく勉強



したい」「見出しの色の調整をもっとしたかった(2名)」があった。[何が一番難しかったですか]に対しては「特にない」が5名、「見出しの配色」が2名、「記事を新聞に取り込む作業」3名、「記事の作成(材料を探し、字数を合わせて作文すること)」4名であった。最後に、「全体の感想を書いてください」に対する学生の回答は次のようである。

- A 新聞作りはとてもいい。作り方を覚えた。
- B 面白かった。新聞の作り方を一人ひとりが体験できたのが一番大切だった。
- C 全くの新しい体験だったのでとても面白かった。またしたい。
- D 面白かった。いろいろ新聞について知った。新聞製作についても勉強になった。
- E 結構いい体験となった。
- F 面白かった。
- G 初めて新聞を作って面白かったし、よかった。
- H 新聞作りはとても面白かった。いい勉強になった。
- I どのような記事を書くか、けっこう悩んだけど、いい勉強になった。
- J 新聞製作過程を理解することができた。自分で作った新聞ができ上がった時、嬉しかった。
- K 一言で言うと、よかったと思う。よい体験だった。
- L 初めて新聞作りをした。面白かっただけでなく、いろいろな知識を身につけた。作り方がよくわかった。いいことだと思う。
- M 新聞作りを最初から知りたかったが、実習では記事や写真を取り込むだけで終わりで、少し残念だった。
- N 新聞作りは日本語の勉強にはいいと思うが、コンピュータを使っただけの実習は簡単すぎて面白くなかった。

15名が肯定的評価だったのに対し、M・N 2名が実習に否定的評価を下している。Nの学生は「新聞作りは面白かったか」という設問に「いいえ」と答えた学生で、コンピュータを使って「もっと詳しく勉強したい」と述べている。

## 8 おわりに

受講生の反応を見てわかるように、「出前朝日」授業は概ね好評であったと捉えることができる。この結果から、「出前朝日」は単調となりがちな作文授業のコース半ばにおけるひとつのバリエーションとして活用できると言えるのではないだろうか。アンケートで何人かの学生が答えているように、字数を制限された中で伝えたい情報をまとめたり、要旨を見出しとして考えたりする作業は、作文の授業として有効である。本センターUプログラム中級段階における作文授業の目標のひとつに「要約の方法を学ぶ」ことが挙げられているように、それを更に進めた形として、上級レベルでのタスクに新聞作成を位置づけることも可能である<sup>8)</sup>。また、3章で紹介したように、『上級日本語』を使用した上級文法の授業の集大成として、新聞を読み解くこと

から作成することへの移行も考えられるだろう。通常は対教師のみの授業に、新聞記者が来て指導をしてくれるというところにも、いつもと違う新鮮味を学生は感じることはできないだろうか。一方で、「出前朝日」が対象を小学生からとしていることからわかるように、留学生とはいえ、大学生である受講者には多少物足りない面があることも否めない。その点は、特にコンピュータに習熟していると思われるNのアンケート回答などからも見て取れる。また、学生も言及しているが、記者講習では見出しのつけ方のポイントが、良い例や悪い例などと共に具体的に示されればより実践的ではなかったかと思う。また、学生が書いた記事の内容について、これは面白かった、ここはもっと詳しくなど、プロの目からみた総評などをもらえれば、その後の授業にもつなげやすいのではないだろうか<sup>9)</sup>。このような試みが学生の作文能力の向上に直接役立つかどうかは、本稿は議論する立場にないが、少なくともコースの一部として取り入れ、学生の文章を書く意欲を引き出すひとつの方法になり得るのではないかと考えている。

- 1) 例えば、野田尚史・森口稔(2003)『日本語を書くトレーニング』ひつじ書房。
- 2) 通常の授業では『大学・大学院 留学生の日本語2 作文編』アカデミック・ジャパニーズ研究会(2001)アルク、を主教材とし、適宜補助教材を使用しながら、1コマでテキストの題材に沿った文章を書くことを課している。書く量や時間は学生によって異なるが、400字から800字程度の文章を大体30分から50分で全員が仕上げている。提出した作文は筆者が添削をし、コメントなどを添えた上で次の授業で各自にフィードバックを行なっている。
- 3) Newspaper in Educationの略。「教育に新聞を」という活動で、1996年より新聞各社が共同で学校に新聞を提供する「NIE実践校」制度がスタートしている。
- 4) 写真の説明の文章。
- 5) 記事①から④までは分量の調整は可能だが、記事⑤に関してはハコ組み(1行13文字)であるため行数調整が難しく、指示どおり書くよう注意書きがある。
- 6) ひとつの問題点が、写真についてである。学生には自分で撮ったものを使用するよう指示していても、インターネットより取り入れたものを使用してしまう場合がある。朝日側は、出典を明記することで可であるという判断だったが、自分たちで作るものである以上、写真もオリジナルであることが望ましい。また、インターネットより取り入れた写真はサイズ変更ができないことがあり、その場合は紙面にかなりの余白を残す。写真については講習当日フロッピーに保存して持参すれば差し替えも可能であるため、やはりオリジナルを求める姿勢が望まれるだろう。
- 7) 学生の表記そのままではなく、筆者が文法や語彙の誤りを訂正し、要旨をまとめた。
- 8) Uプログラムの作文授業の概要については島(2005)参照。
- 9) この点に関しては、講習終了後の朝日新聞側のアンケートに筆者が記入した。

#### <参考文献>

- 安藤淑子(2002)「上級レベル作文指導における接続詞の扱いについて—文系論文に用いられる接続詞語彙調査を通して—」『日本語教育』115号
- 川村千絵(2005)「作文クラスにおけるポートフォリオ評価の実践—学習者の内省活動に関するケーススタディ—」『日本語教育』125号

小南淳子 (2004) 「2002年度UAクラス『作文』授業での取り組みに関する報告」

【大阪外国語大学留学生日本語教育センター授業研究】第2号

西條美紀 (1999) 『談話におけるメタ言語の役割』 風間書房

島千尋 (2005) 「学部留学生に対する作文授業について」【大阪外国語大学留学生日本語教育センター授業研究】

第3号

荘司育子 (2005) 「『上級日本語』の構想とその一考察」【大阪外国語大学留学生日本語教育センター授業研究】

第3号

田中信之 (2005a) 「推敲に関する講義が推敲結果に及ぼす効果」【日本語教育】124号

田中信之 (2005b) 「中国人学習者を対象としたピア・レスポンスービリーフ調査をもとに」【日本語教育】126号

田中真理 (2005) 「四技能の習得と指導—習得研究の成果を指導にどう生かすか—・書く」

【第16回 第二言語習得研究会全国大会予稿集】

矢高美智子 (2004) 「第二言語作文のプランにおける第一言語使用の影響」【日本語教育】121号

Halliday.M.K and Hassan.R (1976) *Cohesion in English*: Longman

安藤貞雄他訳『テキストはどのように構成されるか』(1997) ひつじ書房

(ふるかわ ゆりこ 本センター非常勤講師)